

ジョージ・オーウェル『牧師の娘』

—女性主人公とその信仰喪失について—

久野幸子

(一)

ジョージ・オーウェル(一九〇三—一九五〇)は一九三五年三月にロンドンのグラント社から『牧師の娘』を出版した。発表した作品としては三作目、小説としては二作目であったこの小説は四千部印刷され、売れ残った部数はわずかであったという。発表当時の評価はまちまちであったが、その後作者自身が「ごたませであった」と明言し、再版や翻訳を拒んだこともあって(IV 205)、失敗作、駄作と見なされることが多い。不自然なプロット、非現実的な人物像、作中人物でなく作者が語り過ぎる点など、しばしば指摘される欠点である。

だが、しかし、この小説は、オーウェルの文学全体を正しく理解するためには、決して無視できない、いや、むしろ、注目すべき作品の一つであると思われる。何故なら、この作品は、女性を主人公にしてある点と〈信仰の喪失〉を主題にしている点とで、オーウェルの作品中極めて特異な位置を占めているからである。

この作品発表当時のオーウェルは、四年半つとめたビルマでの警官という職を辞し、小説家として世に出ることを切望しつつ、さまざまな体験を重ね、それらの実体験をどのような小説に仕立て上げるのかに骨身を削っていたという。そこで、以下、本稿では、〈反フェミニスト〉と呼ばれることの多いオーウェルが、何故、彼としては珍しく女性を主人公に選んだのか、又、現世的な主題を主に扱う作家であった彼が、何故、〈信仰の喪失〉を主題として選んだのか、これらの二点を中心にこの小説を論じ、作家の思想と文学形式、語り手と女性主人公との関係などについても検討し、オーウェル文学の本質に迫ってみたい。

(二)

では、まず最初に、女性を主人公とした理由について考えてみたい。オーウェルの描く女性について、ベドウは、彼の小説には中産階級の女性たちが登場し、ドキュメンタリーには主に労働者階級の女性

たちが描かれていると指摘しているが、彼女の指摘どおり、『牧師の娘』には中産階級の女性たちが登場する。しかし、先にも触れたとおり、女性が、男性を主人公とした小説中の傍役としてではなく、主人公として登場するのは、全小説中この作品のみである。主人公ドロシー・ヘアは、題名にも示されているとおり、牧師の娘であり、中産階級——正確には中産知識階級に属するが——の女性を代表する立場にある。とすると、彼女のこの〈中産階級の女性〉という側面は、今までのように検討されてきたのであろうか。

この点について批評史をごく簡単に辿ってみると、この小説発売の十日後、プリチャットが『スペクテイター紙』（一九三五年三月二十二日、504頁）に載せた書評の中で、

オーウェルは、保護されていた中産階級の女性たちは、ちょっとした運命のいたずらで、社会の底辺に生きる無力な存在になってしまうことを示そうとしている。

と少し触れた。だが、それ以後は、翌年八月米国のハーバース社から発売された時、『ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン紙』（一九三六年八月十六日、8頁）に載ったマックヒューの書評中の「オーウェルは、中産階級の（体面が汚されることへの恐れ）を主題としている」という批評に示されているように、〈中産階級の女性〉ではなく、〈中産階級〉そのものが問題とされることが多く、この傾向はほぼ七十年代まで続いたと思われる⁽³⁾。

しかし、八十年代に入り、フェミニズム批評の影響もあり、ドロシーの〈中産階級の女性〉という側面がしばしば注目されるようになった。そして、それらの場合、よく引き合いに出されるのが、ギッシング（一八五七—一九〇三）の『余計者の女たち』⁽⁴⁾（一八九三年発表）である。その理由は二つある。一つは、『牧師の娘』の第四章で、みじめな教師生活を送っているドロシーが、クリスマスの前日、バーナムに近い森の中でぶなの大木にもたれて読む本が、公立図書館から借り出してあったこの『余計者の女たち』であったこと⁽⁵⁾。もう一つの理由は、中産階級を描く作家であったギッシングが、彼の膨大な数の作品中、とくに中産階級の女性たちを扱った作品がこの小説であり、オーウェル自身、この小説を「イギリス小説の最高傑作の一つ」（IV46）と考えていたことにある。

それ故、『牧師の娘』の中でドロシーが二十年以上前に発表されたギッシングのこの小説を読むのは、ドロシー自身の内的欲求である以上に、パタイが次のように指摘するように、

ギッシングの『余計者の女たち』（オーウェルがあきらかに下敷とした小説——このことは『牧師の娘』の中でなにげなく言及されている）⁽⁶⁾（傍点筆者）

オーウェルがこのなにげない言及によって、読者に彼の意図を察して欲しかったからだと推測できる。そこで、クリックが『ジョージ・オーウェル、ある人生』の中で、オーウェルが一九三一年に友人のエドア

ルド・ロディティに向かつて、ギッシングのリアリスト的な小説を賞賛し、この『余計者の女たち』を特に推奨したことを記し、続けて、

オーウエルの心の中で『牧師の娘』が構想され始めていた。

と語っているが、納得できる推論である。

要するに、オーウエルも又、ギッシングが『余計者の女たち』の中で試みたと同様、この『牧師の娘』において、中産階級の男性ではなく女性たちの生き方を探ろうとしたのであろう。それも、ドロシーを主人公とし、彼女を視点的位置に置くことで、彼女たちの生き方を内側から深く追求できると考えたのであろう。

(三)

そこで、この観点からこの小説を眺めてみると、ここには〈貧困に喘ぐ中産階級の女性、それもとくに独身の女性〉が数多く描かれていることに気づく。尤も第二章、第三章には殆ど登場しない。だが、彼女たちへの言及は、第一章、第五章に多く、第四章には特に多い。

第一章で、まずドロシーが詳しく描かれる。サフォーク州の田舎の英国国教会の牧師の娘である彼女は、あと少しで二十八歳という年齢であるが、小説に始めて登場した時に早くも語り手によって、「まだ、すっかり老嬢じみた顔ではなかったが、二、三年たてばそうなることは確実であった」(7)と紹介されているように、彼女には中産階級の

老嬢となる条件はもう十分揃っている。第一章に刻明に描き出される彼女の日常生活は、一日に十七時間も重労働が続く極めて苛酷なものでありながら、ひどく無意味で全く報われることのないものであった。彼女には彼女に奴隷のような生活を強いる無責任で身勝手、かつ専制的な六十歳の父親がいる。尤もこの父親が、たとえ責任感の強い、愛情深い人であったとしても、宗教に無関心な住民が増加しつつある田舎町の世間から取り残された牧師の娘という立場は、彼女の今後の生活が益益(出口なし)のひどいものになっていくことを暗示している。

第一章では、ドロシーの他、教会活動に熱心だが頼りにならないフート嬢やジンを飲んで匿名の手紙を書いている音楽教師のチャナン嬢等が描かれている。

第三章では、トラファルガー広場の場面に登場するウエイン夫人——彼女は没落した中産階級の女性の典型である——と、トールボイズ師の子供を生み、彼を聖職辞任へと追い込んだ三十五歳の聖堂参事会員の姿が、間接的ながら生々しく迫ってくる。

フランネルの下ばきはいて、未婚の牧師を追いかける獵色者ども……心に絶望を抱くようになった老嬢ども……(144)

第四章では、クリーヴィー夫人の経営する〈四流〉私立女子校や近くの学校の女性教師たちのみじめな姿が描かれている。これら群小の私立学校の教師という職業は、ジェイン・オースティン(一七七五—一八一七)が『エマ』(一八一五年発表)の中で〈奴隷に等しい地位〉

と言ひ、十九世紀に深刻な社会問題となつた（ガバナンス）家庭教師」という職業の延長線上に位置していることは明白であろう。ドロシーの前任者達、つまり、無意味で絶望的な教師生活を長く続けた結果、精神に異常を来したらしいブルーア嬢とアル中のストロング嬢も不幸だが、ドロシーが図書館で知り合つたビーヴァー嬢の姿も痛ましい。彼女は二十一年間学校の寮に住み込んで寮生監督を続けた後、やつと通勤になれ、貸間を一間借り、濃いお茶を飲むことだけが楽しみで、クロスワード・パズルで暇を潰すという。ビーヴァー嬢にしても始めから現在の彼女のように、退屈でつまらぬ人間であつた訳ではない。環境が彼女の精神を荒廃させたのだ。その上、こういう彼女たちの老後がわびしく味けない。長年アルコール中毒に苦しんだ末、救貧院ワークハウスで死を待つか、「落ちぶれたシニール・アップン 女」（229）のための有料ホームで死を迎えるか、そのどちらかしかないのである。

第五章では、ウォーバートンの口を借りて、ドロシーの十年後―父親が亡くなつてゐる―の哀れな姿が執拗に繰り返し描かれる。誰れにも相手にされないどころか、蔑まれてゐるであろう、やせこけた独身の中年女性となつたドロシーの未来図がそこにある。そして、このドロシーは、彼女の他に当時の英国に「一万人はいようという」（249）⁽⁸⁾ 牧師の未婚の娘の典型的な姿であつたのである。

（四）

このように、『牧師の娘』には、『余計者の女たち』と同様、中産階級の多くの独身女性の姿が描かれている。しかし、主題及びプロット

はかなり異なつてゐる。

ギッシングの場合、一八九〇年代のロンドンを舞台に、五人の中産階級の独身女性が登場し、彼女たちのうちの若い二人の（結婚）及び（結婚生活）を中心に物語が展開する。一番若い女性は二十一歳のモニカ・マドンで、ただ貧困から逃れたい一心で愛情もないまま二十歳以上年上の紳士ウィドソンと結婚する。もう一人は三十一歳のローダ・ナン。彼女は自活する（新しい女性）で、エヴァラード・バーフットとの恋愛に悩むが、結局、結婚より自立を選ぶ。残る三人のうち、最年長のメアリー・バーフット嬢は、経済的に恵まれており、悩みがないわけではないが、精神的にも自立している。後の二人はモニカの姉たちであるが、三十五歳のアリスは、十六年間の家庭教師生活の間に肥満し病弱になつており、ヴァージニアは長年、御婦人のお相手コンパニオンを勤めていたが、三十三歳の今、早くもアルコール中毒になつてゐる。この二人のように、結婚もできずお金もない中産階級の女性たちの生活は実に悲惨である。が、だからといって、結婚すれば幸福になれるという保証もない。モニカの不幸な結婚生活とその破綻がそれを実証してゐるのである。

ところが、オーウェルの場合、（結婚）や（結婚生活）は主題ではない。成程、ドロシーには四十八歳の不道徳なウォーバートンが求婚している。語り手によると、ドロシーは、「手ごろに綺麗で、手ごろに無器量、つまり男たちがいつもうるさく言いよつてくるていの女」（76）であつたから、しばしば男に誘われた。五年前、隣町の教会の

副牧師、フランシス・ムーン——彼は一年後に死んでしまふのだが——に「名譽ある」(76)求婚をされた。彼女はムーンに好意を抱いていたし、現在もウォーバートンを心から好きだと言う。それなのに、何故、ムーンと結婚せず、ウォーバートンを受け入れないのか。彼女に〈性的不感症〉^{セクシュアルコールドネス}があったからである。確かにこの小説を理解するために、この〈性的不感症〉をどう捉えるのか、大いに問題となる。⁽⁹⁾しかし、私がここで指摘しておきたいのは、オーウエルがドロシーにこの〈性的不感症〉を付与することによって、若い女性を主人公としたこの小説の中で、〈結婚〉の主題を〈求婚〉の段階までに止めている点である。別な言い方をすれば、オーウエルにはそれ以上に追求したい主題があった。それは何か。〈信仰の喪失〉である。当時のオーウエルは、ドロシーのような貧しい中産階級の女性にとつても、結婚の悩み以上に深刻な悩みがあり、それは彼女が生きてゆくためにどうしても必要な心の支え、即ち、信仰の問題であった、と考えていたのである。

(五)

そこで、オーウエルはドロシーを中産階級の女性として描くにあたり、『余計者の女たち』のマドン姉妹のように医者の娘でもなく、キャサリン・マンスフィールド(一八八八—一九三三)の「亡き大佐の娘たち」(一九二〇年発表)⁽¹⁰⁾のジョセフィンとコンスタンティアのように軍人の娘でもなく、牧師の娘として設定したと思われる。オーウエルは、現代では牧師の娘ですら、いや、牧師の娘であるからこそ、〈信

仰の喪失〉に苦しんでいると言いたかったのである。この意味で、第五章でのウォーバートンの次の言葉は、オーウエルの気持を代弁しているに違いない。

イギリスの牧師の娘たちの半数ほどは、おそらくあなたと同じように難しい立場だと思いますよ。そして牧師の約十分の九もそうだと いえますね(244)。

とは言うものの、こう推論する前に、是非検討しておかねばならない作品がある。それはD・H・ロレンス(一八三五—一九三〇)の短篇「牧師の娘たち」⁽¹¹⁾(一九一四年発表)である。オーウエルは、ギッシングに対してと同様、ロレンスにも若い頃から関心を寄せ、大作家として尊敬し、この短篇も書評「D・H・ロレンス著『プロシヤ士官、その他』」(IV 30—33)で取り挙げている。オーウエルは「牧師の娘」を書くに際し、「牧師の娘たち」も十分意識していたに違いない。そこで、今から、この短篇について少々考えてみたい。

ロレンスの「牧師の娘たち」は、ある炭鉱村に住む貧しい牧師リンドレイの娘たちの結婚を扱っている。姉娘のメアリーは、中産階級としての体面を保ちたいばかりに、人間として何か大切なものを欠いている、十三歳位にしか見えない貧弱な男性、しかし一応は紳士であるマッシイ牧師と結婚する。ところが、妹娘のルイーザは、若々しく美しく逞しい炭鉱夫のアルフレッドを人間として愛し、夫に選ぶ。

では、オーウエルはこの短篇をどう読んだのであろうか。先程あげ

た書評の中で、

おそらくロレンスはどこかで、栄養不良で、打ちひしがれて、青春を費やしてオルガンをひいている牧師の娘を見て、その娘が結婚相手に不自由しない労働者階級の暖かい世界に逃げこむというヴィジョンを、突然いだいたのであろう（IV 33）。

と述べ、このヴィジョンは「牧師の娘たち」の主題としては成功したが、『チャタレー夫人の恋人』（一九二八年発表）のような長篇では、引き伸ばすと蓋然性が失われるので主題としてはうまくいっていないと批評している。こういうオーウェルの反応は、彼がロレンスに抱いていた根本的不満に通じるものであろう。オーウェルもロレンス同様、階級差に苦しんでいたが、階級を越えた男女の性的結合を問題解決への切り札とするロレンスの考え方に批判的であった。ロレンスが労働者階級出身でオーウェルが中産階級の出身であるという違い以上の何かがあったのだろう。オーウェルは一九三五年十一月執筆したヘンリー・ミラーの『北回帰線』（一九三四年発表）への書評の中で、次のように語っている。

宗教的信念の崩壊の一つの帰結は、生の肉体的な側面のいい加減な理想化であった。考えようによつては、これはごく自然なことである。というのも、もし死後の生活というものが全くないとしたら、誕生とか、交接とか、ある面ではうんざりするような事実

に対峙することが、明らかに前よりはつらくなる（I 155）。

四八

ここには、オーウェルの〈現代においては、もはや信仰が失われてしまった〉という思いと、〈だからといって、性的なものに安易に逃げ込むべきではない〉という主張が垣間見られる。ロレンスはこの短篇の結末で、結ばれた二人をカナダへ旅立たせたが、オーウェルはロレンスのこういう〈性信仰〉と英国社会からの脱出願望を、逃避であり敗北主義であると考えた。そこで、オーウェルは、ドロシーをして、ウオーバートンの求婚を斥けさせ、失われた信仰を探す一人旅へと向かわせるのである。

(六)

では、ドロシーの〈信仰の喪失〉は、具体的にどのような描かれていたのであろうか。

第一章では、ドロシーの信仰は他の登場人物たちのそれと平行して書き進められている。元来、貴族の末子が伝統的に選ぶ職業であるという不純な動機で牧師となった彼女の父は、この町へ赴任以来二十三年間のあいだに、信者の数を六百人から二百人足らずに減らしてしまった。階級的偏見に凝り固まった俗物である彼は、牧師としての職務は一応果たしてはいるものの、人々に真の信仰を説く意欲も能力もない。教会学校の教師ヴィクター・ストーンは宗教論争に熱中しすぎている。ドロシーが訪れる教区の信者たちの信仰もあやしい。とくにパイサー夫人の天国について神と「売買契約」（51）を結んだような

信仰は妙にドロシーの心を不安にした。では、ドロシーはどうか。第一章での彼女は、時々祈れなくなるが、自然崇拜の気持に助けられ、とにかく祈ってはいる。しかし、四月から十一月まで毎朝、嫌っているからという理由で自分に冷水浴を課し、礼拝中精神を集中させるために自分の身体にピンを刺す、という彼女の態度は、まともな信仰を証明していない。又、それだからこそ、彼はウォーバートンに地獄のことを聞かれても何も答えられない。地獄の存在は、彼女自身、自らを納得させられないでいる「困った問題」であったからである(68)。

第二章、第三章とドロシーは下層社会における信仰のあり方を無意識に探求してまわる。記憶喪失という仕掛けも、記憶喪失直後の八日間の記憶がまるでないという設定も、幾分不自然ではあるが、中産階級の女性に下層社会の暮しを体験させるためには是非必要な文学的工夫であったのであろう。下層社会の人々の中産階級の人々程ドロシーの示す階級性に敏感ではなく、自分たちの生活に彼女をすんなりと受け入れてくれる。まず、ホップ畑でホップの摘み手として働くドロシーは、自分以外の労働者にとって、信仰など何の意味もないことに気づく。皆んな生きていくことに精一杯で、神のことなど考える閑もない。次に彼女自身もある日、ふと、自分の信仰が失われていることを自覚する。祈ろうという衝動が全く感じられないのだ(126)。

第三章のロンドンでの浮浪者生活を描いたところでは、神や信仰についての言及は余りない。一人、墮落牧師トルボイズの存在が意味深長に見えるが、彼は地獄に落ちたままであり、彼の言葉に信仰の逆説はない。

第四章の私立学校の場面では、クリーヴィ夫人が生徒獲得のためにドロシーを教会に通わせる強欲振りや、生徒の親たち、つまり、事務員、セールスマン、小商店主といった下層中産階級の非国教徒たちの偏狭で禁欲主義的な考え方が語り手によって擲擻されている。ドロシーはここでも自分の信仰が戻ってこないことを実感する。やがて、祈ることのできないドロシーは、単調な作業しか許されない教師先生に疲れ、完全な倦怠状態に陥ち入ってしまう。そして、〈信仰の喪失〉は生きる意欲までも失わせることを痛感する。ここで私達は、オーウェルがこの小説でとくに訴えたかったのは、ドロシーの信仰がどうして失われたのかではなく、彼女が自らの信仰喪失にどのように気づき、それをどのように乗り切ろうとしたのかであったことを知る。

第五章では、再びウォーバートンがドロシーに宗教論争をしかける。無神論者の彼はさかんにドロシーの不安を煽るが、彼女は信仰の失われたことと、その失われた信仰がどれ程大切なものであったかを淡淡と語るのみである。彼女が「物事の核心に見出した致命的な虚無」に比べれば、「貧窮、苦役、孤独」さえも大したことではなかったと気づいたのだ(257-258)。結局、ドロシーは虚無の心を抱いたまま牧師館に戻ったのだが、それは、彼女が取り返しのつかない程完全に信仰を失っていたにせよ、それでも「これからの生涯を彼女の生まれ育った宗教的慣習で生き続けなければならぬこと」(220)を悟ったからである。自らの不信心を公表して「他人まで不信心に追い込む」より、信仰のあるふりをして牧師館で生きる方が、より「身勝手」でないと感じたからでもある(244)。彼女はウォーバートンに、

信仰は彼女を見捨てたが、彼女はその精神的背景を変えていないし、また、変えたいとも思わない、ということ(252)

を伝えようとしたが、不可能であった。彼女が彼と結婚しなかったのは、彼女には貧窮に耐える自信があり、一方、彼女の虚無はウォーバートンのような男性との安易な結婚によって埋められるような底の浅いものでもなかったからである。従って、ベドウが牧師館に戻ったドロシーに独身女性としてのわびしい将来しか残されていないことについて、

彼女が結婚しなければ、そうなるのもしかたがないのだ。オーウェルの小説中の女性は、男性なしには幸せになれない。⁽¹²⁾

と批評するが、これは明らかにオーウェルの意図を誤解している。オーウェルは「女性の幸せには男性が必要である」などと言っているのではない。

では、ドロシーが到りついたこの境地を、批評家たちはこれまでどのように評価してきたのであろうか。

まず、彼女の生き方を受動的で静的であると捉える場合は、当然結末に不満である。パタイは、ドロシーが父の元に留まることにしたが、彼女自身熟考したからではなく、ウォーバートンへの(性的不感⁽¹³⁾性)のせいであったことを批判している。一方、メイヤーズは、次の

引用に見られるように、

この小説の不十分でがっかりさせる結末は宗教がこの小説を書いたオーウェルにとって、主要な関心事でなかったことを示している。⁽¹⁴⁾

結末にも足りないさを感じ、それをオーウェル自身の宗教への関心の薄さを反映したものと考えている。つまり、当時のオーウェルの信仰を未熟であると判断するのである。このように結末を否定的に捉える見方が従来主流に近かったと言えよう。

しかしながら、彼女の牧師館への帰還をもっと肯定的に捉えようとする見方もなかったわけではなく、最近、次第に増えている。確かに、外見上彼女は元の生活にそのまま戻ったかに見える。だが、内面では大きく成長したのであり、放浪体験は決して無駄ではなかった。そこで、ドロシーが(出口なし)の状況に戻り、虚無と対峙する姿を(シジフォスの神話)のように考える批評家も多い。例えば、ウドコックは、ドロシーがサルトルが「嘔吐」を出版した一九三八年より何年か前すでに実存的危機に直面していたと説明している。⁽¹⁵⁾

一方、ライリーは、十九世紀ドイツの哲学者フォイエルバッハを引用し、ドロシーが体験する(神の死)は、実はヴィクトリア朝の作家たちの多くを悩ませた虚無と同じであると主張する。⁽¹⁶⁾

このように、この小説の結末をどう捉えるかは、批評家自身の宗教観を反映しているようである。では、そもそも、オーウェル自身はど

のような宗教観を抱いていたのであろうか。

(七)

オーウェルは四十六年間という短い生涯の間に多くの小説や評論、エッセイ等を書いた。それらの作品に盛り込まれた彼の思想には、微妙に変化していったものもある。しかし、こと宗教に関しては、ほぼ一貫した考えを持っていたと言はれる¹⁷⁾。従って、彼がこの『牧師の娘』の中で示した宗教観は、彼の宗教観の基本を示していることになろう。

オーウェルは、この小説執筆に先立つ二、三年間、彼なりにひどく宗教や信仰にこだわっていたという。クリックの伝記によると、オーウェルは私立学校の教師としてヘイズにいた頃、英国国教会高教会派の副牧師であり、かつ社会主義者であった友人を持ち、礼拝ミサに参加し、『チャーチ・タイムズ』を定期購読し、地域社会における教会や牧師のあり方に深い関心を持っていたらしい¹⁸⁾。

さて、オーウェルは宗教をあくまで社会との関係で捉えていた。彼の評論やエッセイに散在する発言の幾つかを拾ってみれば、このことは一目瞭然である。例えば、一九四〇年の「走り書メモのノート」からの次の引用、

かつてわれわれがいだいた形で宗教的信仰は、見捨てられなければならなかったのである。十九世紀頃すでに、それ（キリスト教）は本質的にひとつの虚偽、富める者を富ましめ貧しい者を貧しいままにしておく、半ば意識的な仕掛けであった（Ⅱ15）。（一）内筆者加筆

には、何故、彼がキリスト教に否定的であったかが明示されている。

つまり、彼は〈魂の不滅を信じていて、どうして地上の樂園建設に奔走できるだろうか〉と考えるタイプの人間であった。『牧師の娘』の中で、ウォーバートンが地獄や魂の行く末について再三ドロシーを問いつめる必然性がここにある。オーウェルはこの小説執筆の数年後、社会主義者になったと言はれるが、こういう彼の宗教観は、十年後に出版された『動物農場』（一九四五年発表）においても全く変わっていない。

そうだからといって、オーウェルは、地上に社会主義国家が建設されたら、それで人々が幸福になれる、などと安易に考えていたわけではない。一九四四年四月執筆のエッセイの中で、この点を次のように強調する。

たいていの社会主義者は、ひとたび社会主義が樹立されればわれわれは物質的な意味でいっそう幸福になるだろうと指摘し、そして、人の胃袋が満たされればいっさいの問題は消滅すると想定することで満足している。しかし、真実は逆である（Ⅲ103）。

そこで、キリスト教信仰を否定したオーウェルはその穴を埋める何か別の信念を探すことになるのだが、勿論、簡単に見つかるわけがない。にも拘らず、探求しないわけにはいかない。要するに、『牧師の娘』の結末での彼女の〈信仰を失っても、尚、信仰を求める〉という一見

矛盾した生き方は、オーウェル自身の宗教観を如実に反映したものであったのであろう。

(八)

ここに到つて、私達は、オーウェルの宗教観について考察する場合も、結局、作家としてのオーウェルという原点に立ち返らねばならないことに気づく。何故なら、オーウェルは、人間として常に伝えたい信念や思想があつたが、思想家や社会改革者ではなく、あくまで作家として生きようとしていたからである。そこで、この二つの欲求が彼に〈小説〉ではなく、〈諷刺小説〉を書かせたとも言える。『動物農場』も「一九八四年」（一九四九年発表）もひどい結末を迎えるが、だからこそ諷刺として見事に完結している。この説明は、『牧師の娘』の結末についても当てはまるのではないか。キリスト教的な環境に生まれ育つたことが原因で、結局、ドロシーは精神が麻痺状態にあつて、受身的な生き方しか出来ない。こう考えると、オーウェルは結末部分で、彼女にそうした生き方しか許さなかつた当時の英国社会を間接的に批判しているとも言えるのではないか。

さて、この小説に対するフェミニスト批評家の批判については先に述べたが、他にも色々ある。その一つに、ドロシーの性格と生き方に発展的なところがないの指摘し、「オーウェルには、この世界において女性が果たすべき役割への認識が欠けている」という批判がある⁽¹⁹⁾。成程、そうかもしれない。だが、オーウェルが、女性が男性と対等に扱われたとしても、それによって、神を見失つた現代人がその虚無か

ら抜け出せるわけではない、と考へていたことは確かである。この他、この小説の語り手が〈女性を蔑視し、女性に不信感を抱いている〉という批判もある⁽²⁰⁾。これも大方は納得できる。だが、オーウェルがこの小説以後、二度と女性主人公を登場させなかつたという事実は、彼女の弁明になつてゐるのではないか。『牧師の娘』は様々な意味で実験小説であつたが、この女性主人公というのも一つの試みであつた。だが、成功しているとは言ひ難い。語り手や主人公に自らの実感や実体験を語らせるタイプの作家であつたオーウェルは、自分が両性具有の語り手には成り得ないことを悟つたのであろう。そこで、以後、オーウェルは男性の語り手であることに徹し、男性を主人公とした小説を書いたのである。

以上、オーウェルの思想と文学形式、語り手と女性主人公との関係について考察し、私達は彼が自らの思想をどのように表現するのかに苦慮する作家であることを知つた。『牧師の娘』には、オーウェル文学の特質と限界がよくあらわれている。初期の習作であるこの小説には、彼自身気づかない、あるいは気づいていてもどうすることもできなかった偏見や技巧上の未熟さがあるのは否定できない。だが、信仰を失つて苦悩するドロシーの姿が今も多くの読者の共感を呼ぶのは、そこに、オーウェルの人間を愛し人間の自由を尊び人間社会の改善を願う熱い思いがしっかりと書き込まれてゐるからであらう。

注

- (1) "Letter to Henry Miller," 26 August 1936, in *Collected Essays, Journalism and Letters of George Orwell*, eds. Sonia Orwell and Ian Angus, 4 vols. (Secker & Warburg, 1968), I, 229. 以下、この版からの引用は全て、引用末尾に()で巻数と頁数を記す。なお、本文中の引用箇所については、『オーウェル著作集』全四巻(平凡社、昭和45-46年)の翻訳を使わせていただいた。
- (2) Deirdre Beddoe, "Hindrane and Help-Meets: Women in the Writings of George Orwell," in *Inside the Myth, Orwell: Views From the Left*, ed. Christopher Norris (Lawrence and Wishart, 1984), 139.
- (3) Jeffrey Meyers ed., *George Orwell: The Critical Heritage* (Routledge & Kegan Paul, 1975), 9-10, 58-64.
- (4) George Gissing, *The Odd Women* (W. W. Norton & Company, 1977).
- (5) George Orwell, *A Clergyman's Daughter* (1935, published in Penguin Books, 1964), 226. 以下、この版からの引用は全て、引用末尾に()で頁数を記す。なお、本文中の引用箇所については、三沢佳子訳(御茶の水書房、一九七九年)を使わせていただいた。
- (6) Daphne Patai, *The Orwell Mystique: A Study in Male Ideology* (The Univ. of Massachusetts Press, 1984), 313.
- (7) Bernard Crick, *George Orwell, A Life* (Secker & Warburg, 1980, rpt. Penguin Books, 1982), 213.
- (8) Patai, 96.
- (9) 例えば、スライヤーは、ドロシーの〈性的不感症〉をオーウェルの歴史観との関連で心理学的に解釈しようとする。[Richard Smyer, "Orwell's *A Clergyman's Daughter*: The Flight from History" *Modern Fiction Studies*, 21 (1975), 31-47]。又、オーウェルが、このドロシーの〈性的不感症〉について、當時のフェミニストたちの中核論議に性や母性を嫌う
- 男性の動物的欲情を軽蔑するグループがあったことをからかっているという指摘がある。
- cf. J. A. and Olive Banks, "The Attitude to Sex", *Feminism and Family Planning in Victorian England* (Liverpool Univ. Press, 1965), 107-21.
- (10) Katherine Mansfield, "The Daughters of the Late Colonel", *Selected Stories*, chosen and introduced by D. M. Davin (Oxford Paperbacks, 1953), 252-72.
- (11) D. H. Lawrence, "Daughters of the Vicar", *The Complete Stories*, Vol. 1, (Heinemann, 1955), 136-86.
- (12) Beddoe, 145.
- (13) Patai, 104.
- (14) Jeffrey Meyers, *A Reader's Guide to George Orwell* (Thames and Hudson, 1975), 84.
- (15) George Woodcock, *The Crystal Spirit: A Study of George Orwell* (Boston: Little Brown, 1966, rpt. Fourth Estate Ltd., 1984), 115.
- (16) Patrick Reilly, *George Orwell: The Age's Adversary* (Macmillan Press, 1986), 126.
- (17) Gordon B. Beadle, "George Orwell and death of God" *Colorado Quarterly*, 23 (1974), 51-63.
- James Connors, "'Sugarandy Mountain': Thoughts on George Orwell's Critique of the Christian Doctrine of Personal Immortality," in *George Orwell* eds. Courtney T. Wemyss & Alexei Ugrinsky (Greenwood Press, 1987), 19-26.
- (18) Crick, 226-29.
- cf. Averil Gardner, *George Orwell* (Wayne Publishers, 1987), 36-37.
- (19) Beddoe, 140. Lesli Tentler, "I'm Not Literary, Dear": George Orwell on Women and the Family' in *The Future of Nineteen Eighty-Four*, ed.

Ejar J. Jensen (Univ. of Michigan Press, 1984), 47.
(2) Patai, 98-102.